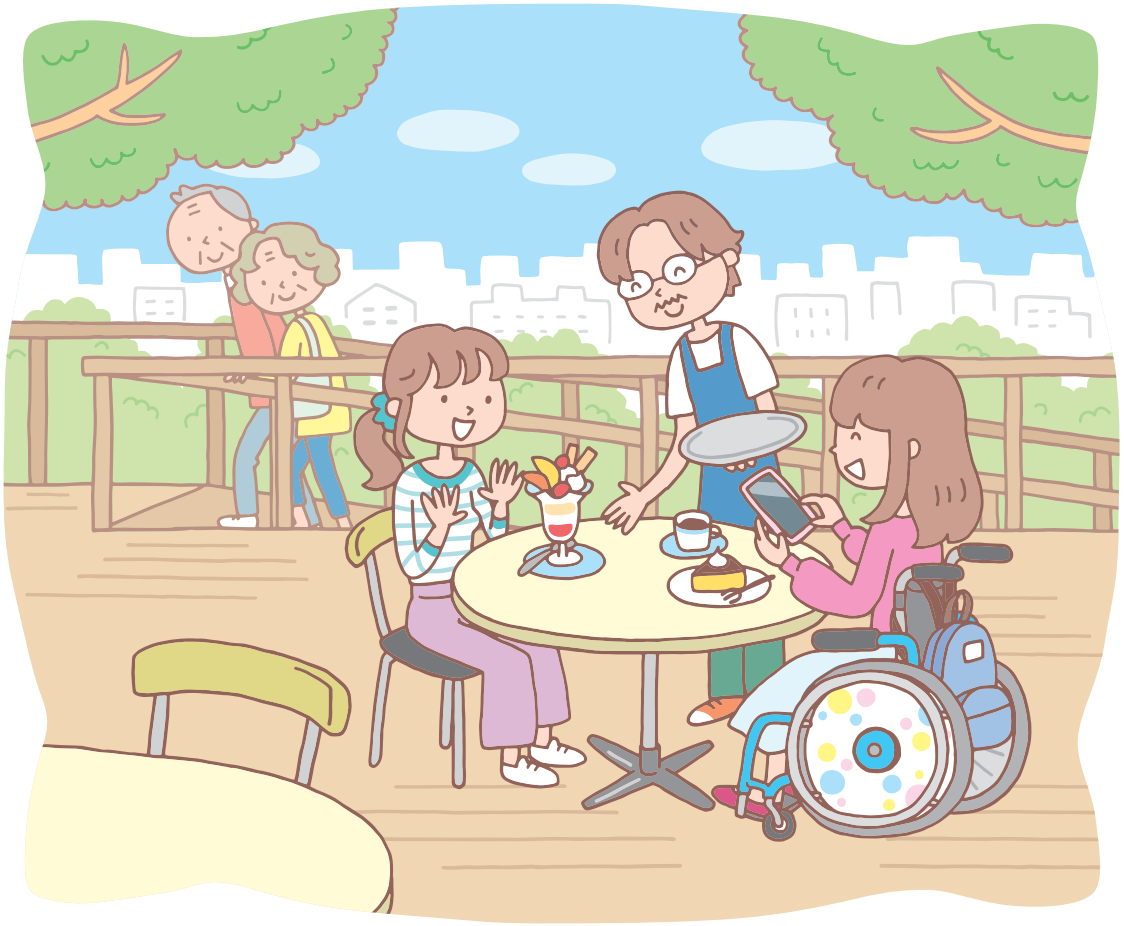
2024年版

ふれあい



バリアフリー住宅実例集

第34回 福祉住宅建築助成事業

公益財団法人
ノーマライゼーション住宅財団

私たちの「願い」

公益財団法人として

私たちは、公益に資する法人として、
「高齢者も障がいのある人も社会で共に暮らし、共に生きることがノーマルである」
というノーマライゼーションの理念に基づき
高齢者や障がい者が安全で快適に暮らせる住生活の整備、 向上を通して
すべての人が生きがいをもって生活できる社会づくりと、社会福祉の増進に寄与
することを目的に、すべての事業に取り組んでおります

私たちのこの「願い」のため
尚一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう
心からお願い申し上げます。

優れたバリアフリー実例をご参考に

ノーマライゼーション住宅財団では誰もが安心・快適に、そして長く住み続けられる住宅の普及を願ってさまざまな取り組みを行っています。

そのひとつ、当財団が創立した平成元年から年1回のペースで発行しるバリアフリー住宅実例集「ふれあい」では、多数の優れたバリアフリーの実例をご紹介させていただいております。

これまでの「ふれあい」の編集を通じて、バリアフリーの建築技術や関連機器、着想は確実に進化を遂げていることを確認してきました。一方で、そうしたバリアフリーに関する情報が、とても少ないことも痛感しています。これまで紹介させていただいた建築主の皆様の多くも情報収集に苦労されたようでした。

優れたバリアフリーの情報を、より広く皆様にお届けしたい。そんな願いを込めて最新号の「ふれあい」をお届けいたします。

高齢の方、障がいのある皆様はもちろん、生涯暮らせる家づくりのヒントとして多くの皆様にお役立ていただければ幸いです。

公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団

理事長　　土屋 昌三

ふれあい

目　次

優れたバリアフリー実例をご参考に　（公財）ノーマライゼーション住宅財団　理事長　土屋　昌三

障がいがあっても家族そして社会の大切な一員 …… 4

新築部門

安全と介護のしやすさに配慮 家族みんなが憩える住まい　埼玉県さいたま市　S様邸 …… 6

介護の負担軽減に考慮して コンパクトにまとめた家　埼玉県さいたま市　M様邸 …… 8

リフォーム部門

小規模なリフォームでも 安全・快適度が格段に向上　北海道旭川市　T様邸 …… 10

～表紙イラスト～

中井 亜佐子さん

札幌市在住のイラストレーター。
北海道造形デザイン専門学校
グラフィックデザイン科出身。
北海道イラストレーターズクラブ
アルファ会員。

第34回福祉住宅建築助成 審査委員（敬称略・順不同）

審査委員長　北海道科学大学 名誉教授　福島　明

審査委員

北海道デザイン協議会 名誉会長	大阪　克彦	北海道社会福祉協議会 副局長	小原　規史
㈱北海道住宅新聞社 代表取締役	白井　康永	札幌市社会福祉協議会 常務理事	菱谷　雅之
㈲環工房　代表取締役	牧野　准子	北海道新聞社 編集局 くらし報道部 部次長	安宅　秀之
フリーライター(「ふれあい」制作担当)	西村　裕広		

小規模住宅部門

施設的な雰囲気を排し
瀟洒なたたずまいを大切に
北海道札幌市　一陽の森Ⅲ　12

障がい特性に配慮した
長く快適に暮らせるホーム
埼玉県久喜市　ケアホーム わかば「桜棟」　14

特集

障がい者とタッグで地域起こし
「すぎうらんど」へようこそ！　16

視覚障がい者は心強いパートナー
老舗電子機器メーカー　ケージーエス　20

心のバリアフリーがあれば
なんでも乗り越えられます
牧野准子さんのラストメッセージ　24

障がいがあっても家族 そして社会の大切な一員

昨年度は物価高騰の影響もあったせいか、福祉住宅建築助成事業は例年になく少ない8件という応募数でした。今号「ふれあい」では、そのうち新築2例、リフォーム1例、小規模住宅2例を紹介しています。件数は少ないものの、いずれも優れた内容の作品が揃いました。

介護する人・される人 共に安全な住まいを実現

新築2例、リフォーム1例は、すべて重度障がいのあるお子さまがいるご家族の住まいの事例です。生活のほぼ全般に介護が必要なお子さまが成長すると共に、介護するご両親は加齢とともに負担が大きくなっていきます。3例とも「いかに介護の負担を軽減していくか」、そして「安全性」という点を重要課題として据えていました。

お子さまが成長すると、とうぜん身体は大きくなり体重も増加していきます。一方で介護するご両親は加齢とともに体力が低下し、介護への負担は大きくなります。屋内や外への移動、入浴やトイレなどで、その課題を解決していくための工夫が凝らされている事例を、それぞれ紹介しています。共通しているアイディアもあれば、お子さまの個性、身体特性などに応じた異なるアイディアもあり、類似した身体状況に対するアプローチの相違は興味深いです。

もうひとつ「安全性」の配慮も優れた内容ばかりでした。もし、お住まいがなんらかの被災に遭遇してしまった場合、重い障がいがある住民をスムーズに退避させる準備は不可欠です。そして危険は被災だけではありません。狭い間口を、車いすを通過させようとして、乗っている人が腕などをぶつけてしまう、無理な姿勢で介護することで転倒してしまうこともあります。介護の負担軽減とも重なる、こうした危険を極力取り除いたほか、お子さまが単身でいるときも様子や動きが確認できるよう、見守りへの配慮がしっかり行き届いた事例ばかりでした。

グループホームを 終の棲家とできるように

小規模住宅は2例の応募がありました。

近年国内では法の改正の後押しもあり障がい者が地域で生活するグループホームが増えてきました。グループホームの利用者の割合は知的、精神に疾患のある人が多数。そのためバリアフリーの行き届いたグループホームが、意外にも少ないのです。利用者の皆さんの身体状況が低下していった場合、バリアフリーでないグループホームで生活していくことは困難でしょう。

今回紹介する2例は、どちらも〝終の棲家〟となりえるよう、バリアフリーへの配慮が行き届いたグループホームであることに、1つ大きな評価がありました。身体状況がどう変化していくのかという予想は難しいのですが、もし車いすが必要になっても外出や屋内での移動が可能であり、トイレも使用できるようになっていれば、利用者の生活を広範囲にカバーできるはずです。

また1例のほうは、内外観共に意匠面に対しても重きを置いています。決して贅沢に資金を投入しているわけではありませんが、施設的な雰囲気を軽減することで、利用者はより快適な生活ができ、外部の人達にとっても親しみやすくなるように心掛けています。まさにノーマライゼーションを念頭に置いた配慮として印象に残りました。

ノーマライゼーションに各方面で尽力する皆さん

今号では3つの特集を組みました。まずひとつ目は、人口減少が著しい地域で独立独歩を目指す、その名も「すぎうらんど」を紹介しています。運営する杉浦一生さんの前職はプロレスラー。ケガのため若くして引退された後、障がい者との出会いを契機に進めている、障がい有無の垣根を越えた取り組みは地域の特色に根差したものばかり。ゆっくりでも確かな計画性の元に取り組んでいる様々な事業が開花すれば、地域の活性化に、そして障がい者の社会参加を拡大する大きな可能性を秘めています。

2つ目で紹介している埼玉県のメーカー「ケージーエス株式会社」では、視覚障がい者が福祉的就労ではなく不可欠な人材として勤務しています。障がいには様々ありますが、同社の工藤社長は「視覚障がい者は視覚に不自由があるだけで、他は何も変わらない。そして見えないからこそ適した職域もある」と断言しています。障がいのある人と共に歩む老舗企業の考え方についておうかがいできました。

そして3つ目。当財団の理事を務め、障がいのある人達への理解を広めるため幅広く活動されていた牧野准子さんが、多くの人々に惜しまれながら、この5月に逝去されました。難病により歩行困難となった牧野さん。いつもユーモアと優しさに溢れたお人柄でノーマライゼーションの啓発に尽力されてきました。その行動が少しずつ注目されるようになり、まさにこれからという時期に旅立たれたことが本当に残念です。貴重な牧野さんのラストメッセージを収録させていただくことができました。光栄でありつつ、大きな喪失感を禁じえません。

間仕切りでスペース分けはしつつも、お子さんの安全に備えて家中に見通しが利くように工夫されています。

安全と介護のしやすさに配慮 家族みんなが憩える住まい

新築部門

さいたま市
S様邸

車いす用の車両と外玄関の高さを合わせました。こうした工夫を含め、この新築では本誌「ふれあい」の過去の実例を随所に役立てていただいたそうです。

外との出入りのしやすさも考慮

S様は3人家族。10歳の長男Aくんは未熟児として生まれ、脳性麻痺による四肢麻痺、視力と知的に障がいがあります。

年齢と共に必要な福祉用具が増え、以前生活していたアパートが手狭になってきました。特に車いすを置く玄関が狭く、段差による使いにくさも大きかったようです。今後の成長によってさらに不便が増すことも考えられたので、家族みんなが快適に生活できる新居を完成させました。

重い障がいがあるけれど元気一杯のAくん。歩くことはできませんが、這いながら移動することができます。知的障がいもあるので、ご両親が家のどこにいても見守り

DATE

≪お住まいの概要≫

構　造　木造在来工法

延床面積　134.41㎡（40.57坪）
1階床面積　96.32㎡（29.14坪）
2階床面積　38.09㎡（11.57坪）

≪家族構成、年齢、身体状況≫

～夫妻＋長男の3人家族～

夫　妻：共に50代。健康
長　男：10歳。脳性麻痺、四肢麻痺、弱視、知的等の障がい

≪新築にあたっての要望≫

- 障がいのある長男が安全に過ごせる
- 家族全員が快適に過ごせる
- 介護の負担を軽減する
- 福祉サービスの利用のほか外出など外との繋がりを持ちやすいようにする

浴室&UT

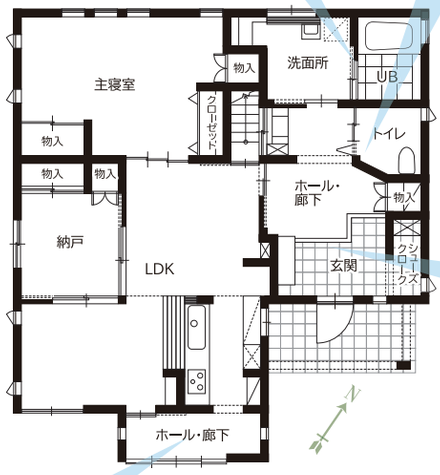
先々入浴用リフトを採用する可能性もあるので、底がフラットの浴槽を選びました。Aくんの着替えなどをするUTのベンチはリサイクルショップで低価格で購入。

トイレ

介助がしやすいスペースを確保。間口が広く取れるよう、引戸と開き戸機能が合体しているドアを採用しました。

引戸

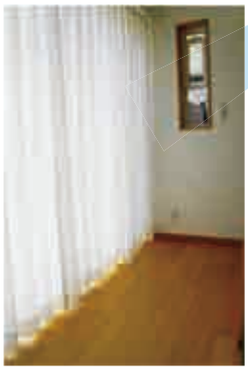
介護のしやすさが格段に上がる引戸をすべての開口部に採用しました。



≪1　階≫

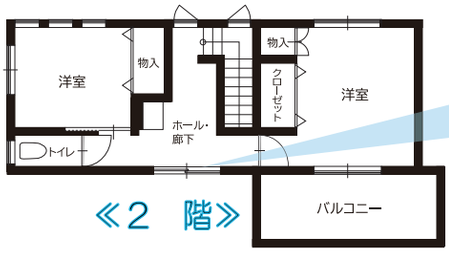
玄関

車いすに乗降させやすいようフロアの形状を工夫。機器を置くスペースも十分です。



快適移動できるホール

キッチンの脇を通り抜けるホールは物干しなどにも活用できます。



≪2　階≫

2階からも見守り

1階のほぼ全体を2階からでも見渡せるよう窓を施工しました。

設計・施工

※施主様のご希望により非公開

ができるように気を配りました。1階はもちろん2階からでも見守りができるようになっています。

Aくんが座位を保持するための椅子を見守りしやすい箇所に置けるようスペースを確保し、段差解消、開閉しやすい引戸も採用。医療機関の利用のほか、ご両親と散歩に連れて行ってもらうのが大好きなAくんが屋外にアプローチしやすいよう玄関回りをさまざまに工夫してあります。

今後の成長次第で、身体機能がどのように変化していくのかがわからないAくん。いかなる場合にも対応できるよう、トイレや浴室などはスペースを確保し、身体状況の変化に応じて手すりやリフトを装着できるようにしています。

重い障がいのあるTさんが過ごす1Fはワンルームのような間取りに。移動が容易で見守りしやすい空間を実現しています。

介護の負担軽減に考慮して コンパクトにまとめた家

新築部門

さいたま市
M様邸

女性でも簡単に持ち運びできる座位保持イス。見守りしやすい場所に簡単に移動できるのが魅力です。

外との出入りのしやすさも考慮

Mさんの二女・Tさんは20代。幼少期に細菌性の髄膜炎に感染し、水頭症、知的障がい、四肢麻痺などの重い障がいが残りました。てんかん発作があり、頭部に入れている髄液を循環させるための管が頻繁に不調になるため通院や入院が欠かせません。

Tさんが成長するに連れ、Mさんへの介護の負担は大きくなっていきました。ご家族が二世帯の大きな住宅で生活するなか、移動、入浴、トイレなどTさんには24時間の介護が必要です。お住まいの広さ故の負担を軽減するため、住環境をコンパクトにする必要性を痛感していたことから、このほど新築を決めました。

DATE

≪お住まいの概要≫

構　造　木造在来工法

延床面積　98.95㎡（29.87坪）
1階床面積　51.34㎡（15.50坪）
2階床面積　47.61㎡（14.37坪）

≪家族構成、年齢、身体状況≫

～夫妻＋2人姉妹の4人家族～

夫　妻：共に60代。健康
長　女：30代。健康
二　女：20代。体幹機能、知的障がい、攣性の四肢麻痺、水頭症。生活全般に介護が必要

≪新築にあたっての要望≫

- 二女の居住空間となる1階を、介護の負担を軽減
- スロープで屋内外の行き来をしやすく
- 安全性への配慮

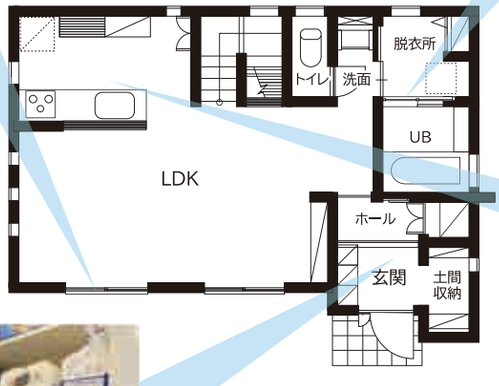
スロープ

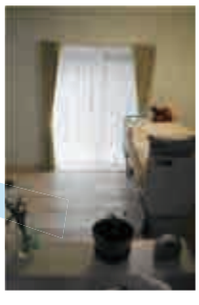
Tさんが寝ているベッドのそばにある窓までスロープを伸ばして施工したので、緊急時にもすぐ屋外へアプローチできます。

浴室

広いスペースが取れなかったため、乗せたままシャワーを浴びてもらうことができるシャワーチェアを活用しています。

≪1　階≫



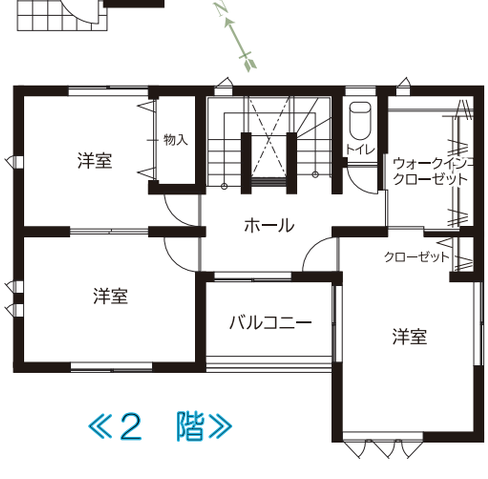


キッチン

Tさんが最も長い時間を過ごす場所は、キッチンからでも見通しがバッチリです。

玄関と収納

埃の侵入を防ぐため高さ3cm程度の段差を付けています。車いすやTさんのための日用品を整頓できるよう大きな収納スペースも設けました。



≪2　階≫

理想のサイズで新築することを想定すると、前のお住まいと別に保有していた土地が、ちょうどいい広さでした。屋内は段差解消したのはもちろん、どこからでもTさんの様子をうかがえるようワンルームのような間取りにしています。そして重視したのは屋外へアプローチするためのスロープ。日常の外出、非常時の避難などを考えると、Tさんを車いすに乗せたままスムーズに移動できるスロープは不可欠でした。

Mさんは「訪問看護の訓練士さんや福祉機器の業者さんなど、たくさんの方々に相談しました。その解答を基に工夫した点もあり、周囲のプロの皆さんへの相談や確認はバリアフリー住宅では不可欠だと思います」とおっしゃっていました。

設計
㈱桧家住宅 埼玉支店
加須市南小浜 509-7
☎0480-31-7323
施工
㈱桧家住宅 大宮北支店
さいたま市北区植竹町 1-816-1
☎048-662-7535
https://www.hinokiya.jp

リビングに出入りする開口部を開き戸から引戸に変え、以前よりほんの５㎝程度広く。それだけで車いすでの通り抜けが格段にスムーズになりました。

小規模なリフォームでも安全・快適度が格段に向上

リフォーム部門

旭川市
Ｔ様邸

キッチンの蛇口を、手をかざしただけで水が出るセンサー式のタイプに変更。障がいのあるお子さんがいるご両親には助かります。

ミリ単位の要望に応えた完成度

Ｔ様ご夫妻の一人息子Ｄくんは、脳性麻痺により四肢が不自由。生活全般において介護が必要です。現在のお住まいは、Ｄくんの介護や日常的に見守りをしやすい間取りの物件だと判断して購入しました。

しかしＤくんが成長するにつれ、いくつかの難点が出てきました。以前は抱っこしたままスムーズに移動できていましたが、成長したＤくんを抱っこではなく車いすに乗せて移動すると、開口部＝ドアを通過する際に腕がぶつかったり、車いすの切り返しが困難になりました。

そして浴室とユーティリティには段差があり、浴室の床は滑りやすいタイプのもの

DATE

≪お住まいの概要≫

構　造　木造在来工法

延床面積　127.86 ㎡（38.68 坪）
１階床面積　81.34 ㎡（24.61 坪）
２階床面積　46.52 ㎡（14.07 坪）

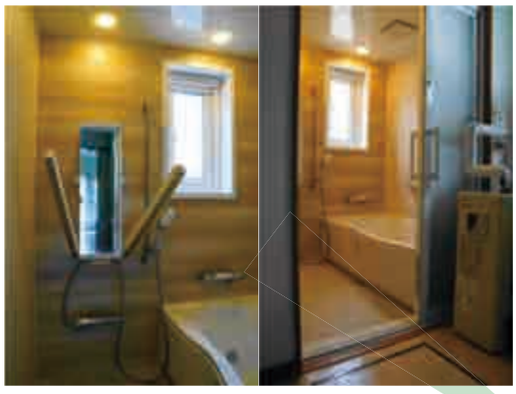
≪家族構成、年齢、身体状況≫

～夫妻＋長男の３人家族～

夫　妻：共に 50 代。健康
長　男：10代。脳性麻痺、四肢麻痺、知的等の障がい。生活全般に介護が必要

≪リフォームにあたっての要望≫

- 重い脳性麻痺のある子どもの成長にと共に、両親の体力が低下してくる前に、安全に入浴させられるようにしたい
- 子どもを安全に移動させられるようにしたい

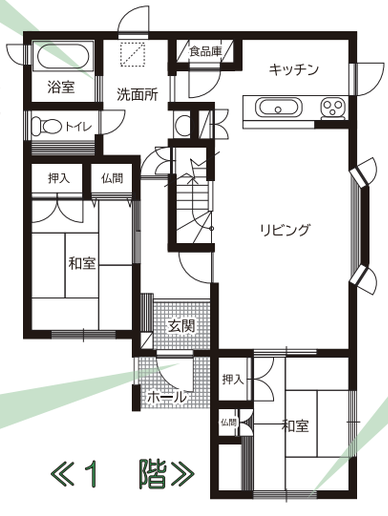


浴室＆UT

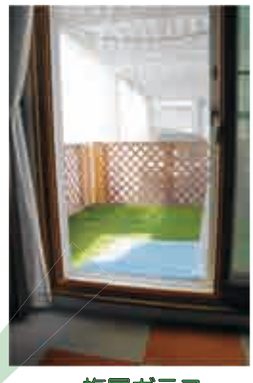
悩みだった浴室とUTの段差を解消し、引戸を採用して間口の幅も広げたのでアプローチは万全。２本の大きなノズルで身体全体に温水が浴びられるボディハグシャワーは入浴しなくても温浴効果が得られるので、介助の負担が大幅に減少します。

エクステリア or 玄関アプローチ

カーポートはウェルキャブ仕様車のリアスロープが屋根下に収まる縦列式にしています。車いすを風除室の手前に停めても雨や雪があたらないよう自立下屋を造作しました。



≪1　階≫

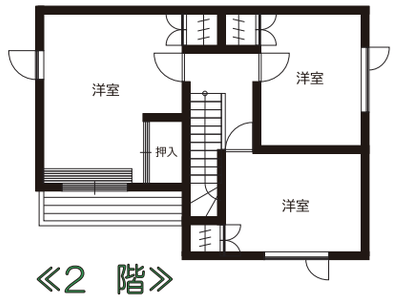


複層ガラス

Dくんが過ごす部屋の寒さを軽減するため、窓に複層ガラスを入れました。

表玄関

玄関フードは車イスでも出入りしやすい引戸タイプを採用。車いすがスムーズに移動できるようコンクリート板と縞鋼板を量販店で調達して段差を解消しました。



≪2　階≫

が施工されていたため、入浴サービスのスタッフが転倒してしまったこともありました。そうした不便さと危険を解消するためにリフォームすることを決めました。

ご主人は以前、管理会社に勤務していた不動産のプロです。要望の精度が高いせいか、相談した数社からは、様々な理由を付けて断られたそうです。今回パートナーとなった企業の担当者は要望に対して真摯に対応し、その甲斐あって、住み心地の向上を実感できるリフォームが実現しました。

「こちらの思いをしっかり受け取ってくれる企業に依頼することが、リフォームする上で最も重要だと思います」というT様。思いを受け止めた企業と共に納得いく完成となっています。

設計・施工

安心大工㈲アウトバーン

旭川市忠和７条7丁目 1-15

☎0166-73-8861

https://www.anshindaiku.com

玄関は2カ所に設置し、1カ所は車いすで出入りできるスロープが設置されています。

施設的な雰囲気を排し 瀟洒なたたずまいを大切に

小規模共同住宅部門

札幌市
一陽の森 Ⅲ

窓の格子、風見鶏…意匠を凝らした施設は、重い障がいがある人も快適に暮らしてほしいという願いが込められています。

重度障がいの人たちが快適に生活

平成4年に発足した光の森学園は、開園当初から重度の障がい者を専門に受け入れてきました。現在は盤渓の本部のほか生活介護事業所3施設、グループホーム14施設のほか、保育所を運営しています。昨年12月に新たに開設したのが、この「一陽の森Ⅲ」です。詳細を見ていくと、非常に合理的かつ行き届いた配慮があります。

まるでプチホテルのような瀟洒なたたずまいで施設的な雰囲気は皆無です。先々利用者の皆さんの身体機能が低下しても対応できるよう、車いすの使用に考慮して廊下の幅やトイレ、浴室のスペースは広く、玄関にはスロープを完備。また利用者さんた

DATE

≪経営主体≫

社会福祉法人 光の森学園
☎011-615-2401

≪入居者数等≫

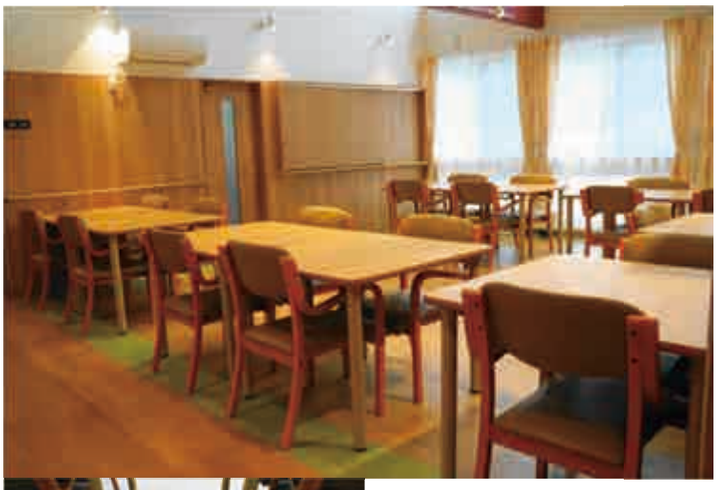
入居者数　19名
入居者年齢　18歳以上

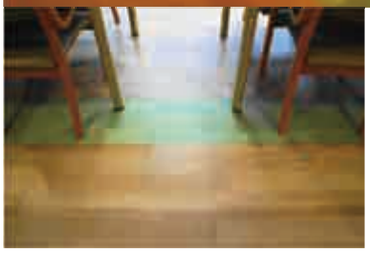
≪家賃等≫

入居時　なし
家賃　36000円
食費　34200円
共益費　実費

≪近隣施設・協力機関≫

札幌市立盤渓小学校
しんかメンタルクリニック（嘱託医）
百石内科循環器科クリニック（協力医療機関）



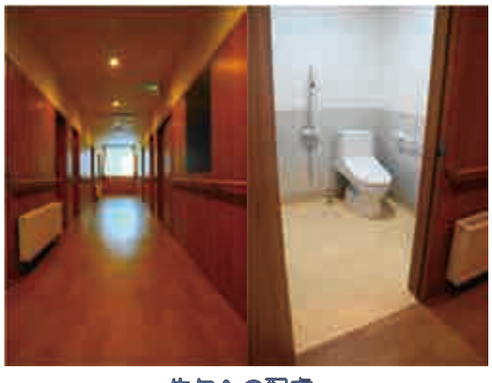


広いダイニングスペース

落ち着いて食事ができる開放的なダイニングスペース。フローリングの一部の色合いを微妙に変え、入居者の皆さんに食事スペースであることを示しています。

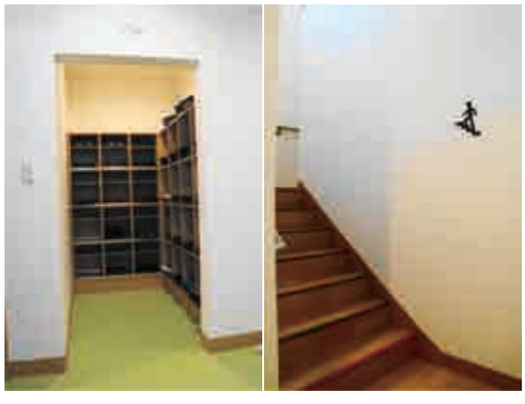
快適な居室

もちろん居室も快適に過ごせる雰囲気に配慮。入居者の皆さん、思い思いに過ごしています。



先々への配慮

先々入居者さんの身体能力が低下し、車いすを利用することになっても対応できるよう、通路やトイレの一部に十分なスペースを確保しています。



さりげないサイン

靴の棚や階段、どういう場所かを示すサインは小さく、それでいてわかりやすいようになっています。こうした配慮で施設的な雰囲気は大きく軽減されています。

ちに各スペースを示すサインも目立ち過ぎないよう施工されています。

光の森学園が運営するホームは札幌市内の西区、南区方面に点在しており、各エリアの拠点のように、利用者の皆さんが通所して日中活動に取り組む生活介護事業所を配置しています。いずれも規模が大きく、そのうち2カ所には体育館まで備わっているから驚きです。利用者の皆さんが一年を通じて身体を動かせるように、それによって健康を維持できるようにという配慮からです。また各ホームは町内会に加入し、行事ごとにも積極的に参加。近隣との交流も重視しています。

学園の名前は全国にも知れ渡っており、利用者の約6割は本州の出身者です。

設計・施工

㈱札都

札幌市北区北22条西3丁目1-37

☎011-758-4505

https://www.satto310.co.jp

平屋建てで一見すると一般的な住宅と変わらない外観ですが、内部はゆとりのある空間になっています。

障がい特性に配慮した長く快適に暮らせるホーム

小規模共同住宅部門

埼玉県久喜市
ケアホームわかば
「さくら棟」

スロープを設置し、段差を解消した玄関回りなど、車いすでの出入りにもしっかり配慮されています。

先々の身体機能の低下にも考慮

埼玉県久喜市の社会福祉法人たいむ共生会では、地域の障がいのある人たちが孤立することなく暮らすためのさまざまな事業に取り組んでいます。10年前に定員6名のグループホームを開設。このほど、隣接して新たに定員6名のグループホームを完成しました。

知的や精神などさまざまな障がいのある利用者の皆さんが共に生活するグループホームでは、例えば「音に過敏」な人もいれば、逆に「大音量の音楽で安らぐ」など、それぞれの障がいの特性によっては利用者間の相性が合わないケースがあります。10年前から運営しているホームでも同様の悩みがあ

DATE

≪経営主体≫

社会福祉法人 たいむ共生会
☎ 0480-23-6002

≪入居者数等≫

入居者数　6名
入居者年齢　27～47歳

≪家賃等≫

入居時　なし
家賃　32000～35000円
食費　18000円
共益費　19000円

≪近隣施設・協力機関≫

生活介護　いちょうの木
社会福祉法人　啓和会
管理センタークリニック

広々した通路

車いすでもゆうゆう移動できる通路にしました。車いすが必要ない入居者さんにも開放感が得られます。

動線と機能性への配慮

家庭的な雰囲気がいっぱいの屋内。ダイニングは入居者さんだけでなく食事のお世話をする世話人さんなどにも使いやすいような動線、機能性や安全性に十分配慮されています。

２タイプのトイレ

トイレは一般的なタイプと、車いすに対応できオストメイトも完備したタイプを用意しました。

居室の一例

隣接する、のどかな田園風景が見える窓は、できるだけ大きくしました。畳敷きだけでなくフローリングの居室も用意しています。

りました。今回の新設は、相性のいい利用者さん同士で住み分けができる環境にしたいという目的も大きかったそうです。グループホームは男女別に建物や階層など生活空間が分けられているケースが多いですが、性別よりも利用者間の相性を重視した結果、こちらでは同一空間で生活しています。

そして〝終の棲家として〟という点にも重きを置きました。車いすに対応でき、オストメイトを備えたトイレ、玄関スロープなど、先々利用者さんの身体状況が低下した際にも可能な限り対応できるようバリアフリーにも配慮。先々は浴室のバリアフリーも視野に入れています。各居室の窓は大きなサイズを採用し、快適に過ごせるよう配慮しました。

設計・施工

㈱カクダイホーム

久喜市久喜中央４丁目９-49

☎0480-22-6666

https://theselect.jp

障がい者とタッグで地域おこし「すぎうらんど」へようこそ！

障がい者の居場所造りと地域振興が同時進行しています。場所は三笠市。その歩みはゆっくりながらも着実に進んでいます。けん引しているのは岩見沢出身の元プロレスラーにして福祉事業運営のプロフェッショナル。軌道に乗れば貴重なモデルケースになることは間違いありません。

経営難だった温泉旅館を核に

三笠市・桂沢湖のほど近くにある「湯の元温泉旅館」。道道116号線の脇道から、屋根に大きく屋号が描かれたこの温泉旅館を、空知近郊にお住まいの方なら一度は見たことがあるかもしれません。この古くから営まれている湯の元温泉旅館の一部が障がい者のグループホームとして活用されはじめたと聞き、さっそく取材に向かいました。

「お待たせしました」と笑顔で対応してくれたのはグループホーム代表の杉浦一生さん。身長180㎝の筆者が見上げてしまうほどの巨漢です。岩見沢ご出身の杉浦さんは地元高校のレスリング部に所属し、卒業後はプロレスラーとして活躍。帰郷した後、継承者を探していた湯の元温泉旅館の事業を引き継ぎ、温泉旅館をそのまま残しつつ別館をグループホ

温泉旅館や浴室を手直しし、以前別館として利用されていた棟続きのスペースがグループホームとして利用されています。

ームとして運営しています。

なぜプロレスラーがグループホームを開設したのか。まずは、そこに至るまでの経緯をおうかがいしました。

予想もしなかった転身と出会い

近年は大きな身体のプロレスラーが少なくなっているようで、身長193㎝でレスリングの実績もある杉浦さんは大いに将来を期待される存在だったことが容易に想像できます。ところがプロレスラーになって間もなく高校時代から癖になっていた肩のケガが悪化。惜しまれながらも引退を余儀なくされました。

杉浦さんが次の道として選んだのが警備員です。工事現場、施設の守衛など警備員にもさまざまな種類がありますが、杉浦さんは要人や著名人等の身辺の安全を守る「4号警備員」、いわゆるボディーガードを目指しました。まさに大きな身体と格闘技術を生かせる警備員です。

4号警備のスキルを取得するための学校に進んだ杉浦さんが研修先として派遣されたのは、要人や著名人の警護ではなく精神疾患がある人を救急搬送などで移送する際の警護を専門とする会社でした。そこで杉浦さんは障がいのある人たちと間近に接していくことになります。

移送が必要な障がいのある人たちを説得するのが主な仕事でしたが、時にはパニックになったり、幻覚・幻聴をのために武装している人までいたそうです。非常に危険が伴う仕事でしたが、杉浦さんは約2年間に渡り警備員を務めます。その期間、数百人の精神疾患者と関わりながら痛烈に感じたことがありました。「こうした人たちの居場所を創らなければ」ということです。

居場所が必要な人たちのために

福祉とは縁が無かった杉浦さんは、障がい者の居場所としてグループホームという形態の受け入れ施設があることを知ります。そこでホームを運営する法人へと転職。高齢者や障がい者の施設で実践を重ねつつ、ケアに関する基礎や施設運営のノウハウを1から学びました。

そして知人と共に、念願だった12カ所のグループホームのほか、放課後等デイサービスなど複数の事業を関東近郊で展開していきます。

どの事業も順調に稼働していましたが、たくさんの施設運営をする中で杉浦さんは少しずつジレンマを感じるようになりました。運営に追われるあまり利用者の皆さんと直接接する時間が作れなくなっていたのです。その他のさまざまな事情もあって、6年間継続した事業から撤退することにしました。順調に事業が稼働していたので、むしろ後悔無く身を引くことができ、長年離れていた故郷の岩見沢に戻ることに決めます。

岩見沢に戻ってから何をするか、まったく決めないままの帰郷でしたが、戻ってほどなく隣の三笠市にある湯の元温泉旅館が事業継続者を探しているという話を聞きつけます。経営的に厳しい状態にあることを承知していた杉浦さんですが、可能性を感じました。

関東で手掛けていた福祉事業のひ

とつにB型就労事業がありました。事業が稼働してしばらくすると、利用者さんの1部から「どうせ我々は給与の低い福祉就労にしかつけない」という声、あるいは明晰な精神疾患の人からは「あなたの事業は我々を利用した金儲け」とまで言われ、自分たちの一方的な主張や希望を押し付けようとされたこともありました。杉浦さんも一人の人間。真剣に支援している利用者さんからそうした言葉を受けるとショックを受けたり憤りを感じることもあったそうですが、反面「利用者さんたちの言っていることも一理ある」とも感じていました。障がいや疾患のため福祉制度の庇護を必要とする人たちがいる中で、もう少し訓練や経験を積み、社会との接点、人との繋がりが増えることで、福祉制度の庇護を受けなくとも自立生活ができるだろう人たちも存在していることを、杉浦さんは経験の中で知っていたからです。杉浦さんは温泉旅館を引き継ぐことを決め、障がい者の支援と共に自立につなげるための場所として、新たに運営していくことを目指しました。

現在はイベントなどに併せて杉浦さんが製作・販売している「国王プリン」「石炭プリン」を「すぎうらんど」の鶏卵を使い、GH利用者さんが製作、販売していく計画です。

地域や施設の特性をフルに活用

杉浦さんが継承して2019年から新たなスタートを切った湯の元温泉旅館。温泉施設や旅館は一部改装して、これまで通り稼働し、別館だった建物をグループホームとしました。

温泉は近隣住民への割引などサービスを充実させ、食事ができるスペースではメニューを一新。取材当日もたくさんの車が停まっていました。

広い敷地内には鶏の飼育場所のほか、杉浦さんや利用者さん、協力者の皆さんと共に手作業で整備したソロキャンパー専用の野営場を設営しました。「野営場はソロキャンパーが限定10張と小規模です。キャンパーの皆さんが入浴や食事で温泉を利用していただくことに期待しています」と杉浦さん。温泉の売り上げをアップしていくための取り組みです。ホームと合体したことで温泉旅館の収支は安定しましたが、事業収益を上げていくことも不可欠であると考えています。

新たな湯の元温泉旅館と周辺施設は、杉浦さんが「すぎうらんど」と命名。グーグルマップでこの場所を検索すると「湯の元温泉旅館(すぎうらんど)」と表示されます。

杉浦さんは湯の元温泉旅館に拠点を据えると同時に、積極的に地元の皆さんと交流を深めながら地域の現状を把握していきました。湯の元温泉旅館の西側、幾春別エリアは三笠市のなかの市街地のひとつですが、人口の減少は著しく、限界集落になりつつあります。空き家や空き店舗が増加しており、そうした空き物件を「必要なら使ってほしい」という話が杉浦さんの元に届くようなります。そのうちの何軒かを譲り受け、うち1軒の空き店舗はすでにグループホームとして稼働。先々自立できそうな利用者さんたちが生活しています。

空き物件のなかにはコンビニだった店舗もあり、「すぎうらんど」のもうひとつの拠点になりそうです。「『山の駅』と称して、ちょっとしたドリンクやスイーツ、そして近隣のキャンプ場を利用する人たちのためのグッズ販売を計画しています。また店内の広いバックヤードを利用して食品加工も行う予定です」と杉浦さん。こうした商業施設をよみがえらせ、障がいのある人たちが働ける場所に転換しつつ、施設が独立採算で稼働させられる収益を上げていくことを目指しています。

空家が増加する一方で新たな商業施設のオープンや地域の人気店もあり、障がいのある人たちに理解があるのも心強いです。

地域には空き店舗だけでなく、離農により空いた農地もあり、そこにも着目。農業法人格を取得し、この地域に最適な作物を栽培していく予定です。

また杉浦さんは地域と交流しながら、幾春別エリアには他の地域からも来客が絶えない大人気のそば店、移住者がオープンしたスイーツの店などがあることを知りました。そうした店で利用者さんの受け入れを相談すると快諾してくれたそうです。地元の皆さんと共に障がいのある人たちの自立につながる足がかりも着々と築いていっています。

地域と障がい者の自立の拠点に

他にも、ここに紹介しきれない短期的なものから中長期的な計画の元、障がい者の自立につながる多くのプランを温めている杉浦さん。「現在は障がい者の就労支援制度が機能していますが、やがて無くなっていくと考えています。その前に障がいがある人たちでも自立生活できるようなモデルを作ることができればと思っています。旧産炭地の三笠市は人口流出が特に大きい地域ですが、こういう場所にも眠っている可能性があり、それを引き出したいですね」。

ホームには現在16名の利用者さんが入所。うち1名は温泉旅館のスタッフとして活躍しています。「現在は一般就労できている利用者さんは1名ですが、去年は生活保護を抜けて就労・自立した方が1名います。他社に就労したので貴重な人材が流出してしまったことになります」と笑う杉浦さん。確かに利用者さんが今後自立していくと、収入面を考えればホームにとってマイナスになります。しかし杉浦さんは「ここが利用者さんの自立に取り組んでいるホームということが伝われば、入居を希望される方が次々にいらっしゃると思っています」と、その点は心配していません。

基本的に福祉事業・施設の運営は収入を国からの報酬を元に行われます。その報酬は概ね3年に一度見直され、ほとんどの事業は見直しの都度金額が下がっていきます。そのような厳しい事情から、福祉事業以外の収入を模索する動きも出ています。「すぎうらんど」では可能な限り福祉事業の枠を脱却し、独立独歩で運営していくことを目指しています。旧産炭地のみならず道内、全国には人口流出に悩む地域が多くあります。「すぎうらんど」が今後隆盛していけば、そうした地域にとって貴重なモデルケースとなるに違いありません。

湯の元温泉旅館(すぎうらんど)

【所在地】　三笠市桂沢94
【電話】　01267-6-8518
【日帰り入浴】
営業時間／火～金　15:00～20:00(19:30最終受付)
土・日・月曜日、祝日　10:00～20:00(19:30最終受付)
※6～9月は10:00～21:00(20:30最終受付)
入浴料(税込)／大人:600円　子供:250円　3才以下:100円
https://yunomoto-onsen.com/

視覚障がい者は心強いパートナー

老舗電子機器メーカー ケージーエス

昭和28年設立の電子機器メーカー・ケージーエス㈱では、視覚に障がいのあるスタッフがいきいきと働いています。福祉的就労ではなく立派なビジネスパートナーとして迎えられている視覚障がい者のスタッフ。その仕事の様子、その存在がどのように機能しているかなどについてお聞きしました。

視覚障がい者向け機器の先駆的メーカー

パソコンやスマートフォンと接続して画面の文字情報を点字にしたり、点字では困難なメモを容易にできるなど、点字を利用する皆さんにとって画期的な機能を備えたハイテク機器「点字ディスプレイ」のメーカーの「ケージーエス㈱」。埼玉県小川町に本社、フィリピンに生産拠点を置き、視覚障がい者の暮らしを支える多彩な機器を製造しています。本社には現在、視覚に障がいのある3名のスタッフが在籍。主要取扱製品が視覚障がい者向けのハイテク機器であることから、3名のスタッフはそれぞれSE（システムエンジニア）、カスタマーサポート、カスタマーサポートの補助という職種を担い、欠くことのできない戦力として事業の中枢を支える存在です。

昭和28（1953）年に通信機器部品メーカーとして創業した同社は、電気を物的な運動に変える「アクチュエーター」と呼ばれる技術の一種、電気を流すことで電磁石のような働きを生み、モノを運動させることができる「ソレノイド」という技術で一躍有名になります。

一般的にはあまり馴染みはありませんが、様々な電化製品に導入されているソレノイドのメーカーとして知られるようになった同社は、工業技術院（現国立研究開発法人産業技術総合研究所）から「軽くて発熱せず、音の静かなアクチュエータを作れないか?」という依頼を受けました。ソレノイドを構成する部品の素材は金属で重く、電流を流して使うものなので発熱し、鉄の部品があたる音がします。ソレノイドメーカーが別の「動くもの」を開発するに等しい依頼でしたが、どうにかその要望に応える事ができ、今日の「点字セル」の基礎技術になっています。

ケージーエス製の点字ディスプレィ。国内では同様の機器を開発・生産しているメーカーは無い。

当時は、ビジネスの現場に導入され始めたオフコン＝オフィスコンピュータと連結し、読み込んだ文字を点字として表示する「点字セル」という機器が出始めた時期でした。それまで文字を点字にするには手作業か、オフコンの文字を点字として用紙に出力するしかありませんでした。「点字セル」は接続した文字を読み込むと仕込まれているピンが上下し、点字を表示するものです。まだ国内には無く、同社の開発した新しい技術も従来のソレノイドを必要とする取引先にはニーズがありませんでした。実証的な要素の強かったその事業を採算ベースに乗せ運営していくのは困難でしたが、マーケットをリサーチするとヨーロッパでは既に同じシステムの点字セルが活用されており、すぐ売り込みを開始。同社のシステムは「画期的」と高い評価を受け、輸出をメインとした製品として売り出していくことになります。

全盲のSEが新製品のアイディアを売り込みに

時代と共に社会はOA化が進み、オフコンに取って代わったパソコンがビジネスだけでなく一般にも瞬く間に普及していきます。パソコンは音声ガイドなどによって視覚に障がいがある人も利用できるツールで、普及に応じて視覚障がい者の職業訓練校などでもカリキュラムに組み込まれていきました。並行してSEなど技術者の育成も進んで行きます。

視覚障がい者と共に歩む企業として、これまで多数の表彰を受けている。

ケージーエスではパソコンの普及に応じて、新たな点字セルをアップデートしていきました。その矢先「点字セルの技術を応用すれば、視覚障がい者がもっと自由に情報アクセスできるようになる」という提案を持ち込むSEが現れます。全盲ですが、一般的なプログラマーと変わらないスキルを取得しており、この提案によって生まれたのが同社の主力製品のひとつとなる点字ディスプレイです。海外にも類似した製品はありますが、国産で初の点字電子手帳として販売されています。点字ディスプレイの詳細につきましては同社のホームページ、または当財団発行の「With Life」59号で紹介しています。ぜひご覧ください。

視覚に不自由、それ以外は何も変わらない

以上のような経緯のなかで、同社は視覚障がい者と共に歩むメーカーとして今日に至っています。現在は視覚障がい者のスタッフ3名のうち、2名は正規雇用、1名は育児への負担軽減等から、ご本人の希望でパートとして勤務しています。

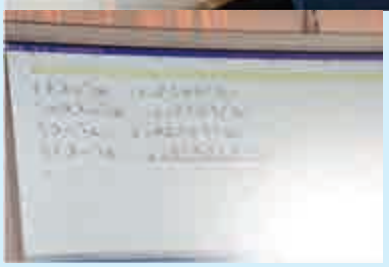
今年4月より、企業における障がい者の法定雇用率は2.5％以上と定められました。しかし達成している企

「視覚障がい者を戦力として迎えつつ、活躍できる職域がしっかりあることを社会にアピールしたいです」と話す工藤良次代表取締役社長。

業の割合は約50％と半数にとどまっています。

「弊社でも最初は不安が大きかったです」とケージーエスの代表取締役社長・工藤良次氏は振り返ります。「弊社では点字セルの開発をきっかけに、視覚障がい当事者や関係団体とのつながりは持っていたわけですが、社員として迎えるには不安がありました。視覚障がい者への理解はあったつもりでも、労働環境をどのようにバリアフリーにすればいいのか、どのようなケアが必要なのかという点について、まだまだ知識が足りなかったからです」。ところが現在は「ほぼ放置です」と笑います。「労働環境に関してはトイレ、社屋の階層がわかるよう点字のサインや点字ブロックを用意した程度で、とても少ない改良しか必要ありませんでした。また弊社へは公共交通機関を利用して通勤する際、電車やバスを利用します。通勤経路の道順や危険については、高齢・障がい者雇用開発機構や同行支援サービス団体などの皆様が、単独でも安全に通勤できる支援を提供されているんです。社内環境については、見える私たちとは異なる感覚で社内のレイアウトなどを把握して本人たちがすぐに適応します」。

業務に関しても、一般の社員とまったく差はありません。「SEのスキルはもちろん、カスタマーサポートなどは、視覚障がいのある人たちは見えている私たちよりも電話による説明などが遥かに長けていると思います。見えている私たちは、製品を目の前にしないとお客様に説明するのに大変苦労します。しかし彼らの対応を見ていると、しっかりと頭に描けているように映るんです。特に視覚障がいのあるお客様からのご相談への対応は、彼らでなければ難しいです」という工藤社長は、共に働く仲間として視覚障がい者の能力が過小評価されていると感じています。「目が不自由だという以外は、何かが劣っているということは決して無いと断言できます。特に弊社業務に必要なデジタル関連、プログラミングなどでは障がいの無い人たちと変わらない仕事ができますし、コールセンターなど会話によるコミュニケーションが主な業務は、むしろ見える人たち以上に繊細な対応ができると感じています。弊社ではフィリピンに拠点工場を置いています。グローバル経済のなかでフィリピンは『世界のコールセンター』という立ち位置を確立しようとしていますが、技術を取得すると転職するジョブホッピングが日本以上に盛んで、コールセンター業務になかなか人材が定着しないという悩みがあ



全盲のスタッフが点字ディスプレーの機能を見せてくれた。

るようです。しかし視覚障がい者ならコールセンター業務に適正があるという認識が広まってきました」。

障がいがあっても能力を生かせる職域がある

視覚障がい者と密接な関係にあるケージーエスですが、あくまでも自由経済のなかで運営している一企業であることを工藤社長は強調します。「私たちの事業は視覚障がいのあるお客様に向けたビジネスであって、助成金などを受けながら運営する福祉事業ではありません」。あくまでも利益を上げて運営していくビジネスとして日々の業務に取り組む一方で、障がいの有無による障壁を取り除きたいという思いも強く持っています。「障がいの有無を越えて皆が影響し合って、少しでも社会に役立っているという実感は、私も含めて誰もがほしいと思うんです。だから、みんなでその実感を持とうよ、そんな願いを持っています。障がいがあるというだけで、その輪に入りにくい現状を少しでも変えられたらいいと思います」。同社では見える人も見えない人も変わりなく仕事に向き合い、日々過ごしている様子をSNSで発信もしています。若年層の利用者が多いSNSを通じて〝見える人も見えない人も変わりは無い〟ということを、少しでも知ってもらいたいからです。

どんな仕事でも万能にこなせる人は、障がいの無い人の中にも非常に少ないのではないでしょうか。逆に障がいがあるというだけで、備わっている能力すべてを否定されてしまうことは多いです。その偏見が無くなることで社会参加できる障がい者はもっと増えていくはずです。近年は国内のどの業界でも人材不足で悩んでいますが、障がい者の能力を活用することで、その状況を解消するまではいかなくても、大きく改善できる可能性があると考えるのは筆者だけでしょうか。

文字をスキャニングして点訳する機器、画像に凹凸を付けて視覚障がいのある人が触感で理解できるようにするコピー機などさまざまなハイテク機器を生産している。

要所に点字や点字ブロックを施工するだけで不自由の無い労働環境が実現できる。

ケージーエス株式会社

【所在地】 埼玉県比企郡小川町小川1004

【営業品目】 ★福祉機器　視覚障がい者用点字セル、視覚障がい者用点字ディスプレイ、点字ラベラー（自動点訳）、点字プリンタ、立体コピー作成機、スマートグラス

★ソレノイド製品

【問い合わせ】 電話／0493-72-7311　FAX／0493-72-7337

【URL】 https://www.kgs-jpn.co.jp

心のバリアフリーがあれば なんでも乗り越えられます

牧野准子さんのラストメッセージ

ノーマライゼーション住宅財団の理事・牧野准子さんがこの春、多くの人々に惜しまれながら永眠されました。障がい当事者である建築士の目線でバリアフリー、ノーマライゼーションへの提言ができる貴重な存在として、多方面でご活躍されていた牧野さんが残した最後のメッセージをお届けします。

何もできなくて、ごめんね

牧野さんと当財団の出会いは2017年です。福祉住宅助成事業に応募いただいたのがきっかけでした。ご自宅のマンションを、両下肢に麻痺があっても自立生活を可能にしたリフォームのアイディアが秀逸で、その年に応募いただいた作品中、リフォーム部門で最も高い評価を獲得しました。審査の中で牧野さんご自身が障がい当事者であると共に建築のプロであることを知り、当財団の事業に貴重なご意見をいただけるに違いないと考え、理事に就任いただくことになったのです。

牧野さんは長年、建築業界に携わってきました。二級建築士、インテリアコーディネーターなどの資格を取得し、平成9年に建築デザイン会社ユニバーサルデザイン(有)環工房を設立。平成16年には北海道インテリアコーディネーター協会の会長に就任します。

その矢先の平成17年、ウイルス感染が原因の進行性の難病が脊髄に発症。両下肢が麻痺して歩行困難になり、車いすの生活となりました。牧野さんは当時の辛い思いを忘れることができません。

「当たり前にできていたことの多くが突然できなくなり、夫や子どもたちに介助してもらったり手伝ったりしてもらうことばかりでした。もちろん好きで難病になったわけではありません。だけど、できないことを手伝ってもらってばかりいるうち、家族だけでなく世間全体に対して『何もできなくて、ごめんなさい』という、後ろめたい気持ちになっていました」。

牧野さんに限らず人生の途中で障がい者になった人のほとんどが、同じ気持ちになってしまうよ

うです。

気づきを声で伝えなくちゃ

しかし長い時間を経て、牧野さんは少しずつ気持ちを前向きに変えていきます。障がいを持つことで初めて見えてきたこと、それまで気づくことができなかったことを、世の中に発信していこうと思うようになりました。

建築や街づくりへの提言も、そのひとつです。牧野さんは建築士と障がい当事者双方の視点で現実的な提言ができる稀有な存在であり、自宅をリフォームしたことで、バリアフリーによって障がいがあってもできることを増やせること、自分でできることが増えることで高齢者や障がい者が大きく自信を取り戻せることも、実体験を経て確信となっていました。技術的な提言に止まらず、難病になってからの体験談なども広く伝えていくことで、高齢者や障がい者が自信を持って生きていくお手伝いができれば。そう考えた牧野さんは、あらゆる委員会やセミナーに積極的に参加し、障がい者目線からの提言を発信していきます。持ち前の朗らかな性格、ユーモアたっぷりの語り口調。牧野さんの存在は注目されるようになり、様々な方面から講師や委員として招聘されるようになりました。

後ろ向きだった気持ちは大きく変化し、活動の場を広げていくなかで、改めて日本社会におけるノーマライゼーションの現状も見えてきました。

「近年は国交省のバリアフリー新法が改正となったことなどを見ても、少しずつノーマライゼーションについて心の教育の重要性が見直され、前進しているとは思います。でも、実を結ぶにはまだまだ時間がかかるのではないでしょうか。多くの組織に関わらせていただくと、トップダウンでボランティア、社会奉仕的な意識でバリアフリーに取り組んでいる組織が増えているとは思います。しかし、ふたを開けると下の人たちに〝やらされている感がありあり〟というケースが多いです。一生懸命取り組んでいる人たちの話を聞くと『実は障がいのある子どもがいる』など、身近にそうした人たちがいるから自分事として考えられるという場合がほとんどです。そうでない人にとっては、まだまだ人ごとで真剣に捉えられていないと感じてしまいます。

近年の意識の高まりに並行して法定雇用率が上がってきたことなどもあり、障がい者雇用を促進しようとする動きなども見られますが、それはイメージアップやペナルティを回避するためだけの動きも多いようにも見えます」。

しかし、こうした現状に対して牧野さんはさらに踏み込んだ考えを持つようになりました。

「日本は昔から、障がいのある人たちを人目の付かない場所で生活させたり、障がいのある家族がいると恥のような感覚がまん延してきました。それこそ〝障がい者は悪〟という感覚が、私たちや親の世代から上の人たちは刷り込まれてきたと思います。時代が進むにつれ、その感覚は少しずつ変化していますが、大きく変化するには時間がかかると思います。

だからこそ自分自身も変化していかなければいけないと考えるようになりました。障がい者という存在が蔑ろにされることに対する不平不満を身内で愚痴っていても前進することは何も無いと思い至ったんです。

ある大学で講師をした際、学生

さんから『なぜ世の役に立たない障がい者に公金を使わなくてはいけないのか』という意見が出ました。ではもし今あなたが障がいを持ち、支援が必要になっても同じことが言えますか?と聞くと、何も答えようとしません。その学生さんは他人事としてしか考えられないのでしょう。

他にも車いすを理由に入店を拒否されるなど、難病になってから辛い思いもしてきました。でもそれは、悲しい、悔しい思いをさせられた人たちに非があるのではなく、日本社会全体に問題があると考えるようになったんです。障がいに対する差別ではなく、そうした差別が生まれる環境に陥っている世の中を良い方向に向けたい。そのために、障がい者になったからこそ気づけたことを発信していこうと、マイナスに向きそうな気持をプラスに変えていきました」。

一緒に〝発見〟しませんか?

そう思い至った牧野さんの行動力は驚くようなものでした。その経歴を拝見すると目を見張るほど。たくさんの委員や講師などを歴任し、障がいのある立場からの提言をしていきます。

そうした活動を通じて多くの人たちと接するうち、さらに新たな気づきもありました。

「福祉に関わる人は、なぜ関わるのか。それは新たな発見や楽しさ、感動があるからだと思うんです。少しの好奇心でのぞいてみて、これまで出会わなかったような経験がたくさんできることで関心を持っていただけるケースにたくさん出会ってきました。

例えば近年はボランティア募集の告知を目にする機会が増えています。ただボランティアというだけでなく、もっと具体的に『〇〇を手伝ってください』『〇〇できる方いませんか』と具体的な内容を知らせることで『それなら自分にもできる』と興味を持って参加される人は、かなり増えるのではないでしょうか」。

そうして集まってくれる人たちに対して、手伝いを必要とする人たちは接し方に配慮するべきだというのも牧野さんの考え方です。

「障がいがあるためにできないことに対して、海外の当事者は声を大にして主張します。しかし日本で同じことをやると反発の声が大きいのではないでしょうか。私は何かしてもらうと、必ず感謝の気持ちを伝えるようにしています。相手にも『喜んでもらえた』と感じていただけると、別の障がい者に対しても同じことをしてくれる。そんな連鎖が生まれてくると思うんです。『障がいがあるから手伝ってもらって当たり前』という態度では、そういう連鎖は起きにくいと思います」。

BFの普及に必要なこと

障がい者である建築のプロである牧野さんの目から見てバリアフリーは進化しているでしょうか。

「技術面、意匠面では大いに進化

していると思います。ただ、そうした進化が適切に情報化され、提供する側・される側に認知されているかというと、残念な状況としか言いようがありません。どの企業がバリアフリーに精通しているかと問われても、障がい当事者として業界に身を置く立場の自分でさえ、はっきり回答できません。正直、私自身にもわからないんです。

熱心に研究されている技術者がいらっしゃるのは事実です。そして新しい住宅は段差解消など最低限のバリアフリーにも配慮しているというケースが多くなりました。ただ、あくまでも最低限です。ユーザーごとに必要なバリアフリーはまったく異なりますから。

例えば建築関連の講師をしていると『障がいがあっても使える水回りは、どのようなものですか』などの質問をされます。水回りに限らず、ユーザーにとって最適な仕様というのは障がいの種類や身体状況によってまったく異なります。私自身のリフォームの際も『障がいがある』という理由だけでユニバーサルキッチンを薦めてくる企業がありました。でも私が最も使用しやすいのはノーマルタイプのキッチンなんです。

さまざまな先端事例や情報が、一般ユーザーと共に提供する設計・施工会社にこそ共有されて、バリアフリーの普及が加速していくと信じています」。

そして技術的な面だけでなく、適切なバリアフリーがどれだけ大切なことかという情報も広がってほしいということも牧野さんは願っています。取材のなかで幾度となく「満足いくバリアフリーにできたことで人生が大きく変わった」とおっしゃっていました。バリアフリーによって生きる自信を取り戻せることを、牧野さんご自身が実体験されたからです。

そして牧野さんが最後に強調したのは、何より大切なのが「心のバリアフリー」ということです。

「技術で克服できないバリアはあるでしょう。でも心のバリアフリーで克服できるはずです。何も知らず大きな段差があるお店に行ったとき、すぐ店員さんが来て、何気に『よいしょ』と持ち上げて店内に招いてくれました。手伝っていただいたことに対してお礼したことは言うまでもありません。こんなリレーションシップがあたりまえになれば、ノーマライゼーションという課題は大きく前進するのだと確信しています」。

難病になったことで得た気づきを、孤軍奮闘しながら声を上げ発信していった牧野さん。牧野さんがまいた種は必ず実を結ぶことを確信しています。心よりご冥福をお祈りいたします。

牧野准子　まきのじゅんこ

ユニバーサルデザイン
有限会社環工房（かんこうぼう）　代表取締役

～歴任した委員、役職等(令和以降)～

- ○公益財団法人ノーマライゼーション住宅財団理事
- ○北海道中小企業家同友会インクルーシブ委員
- ○北海道住宅対策審議会委員
- ○JERCO（一社）日本住宅リフォーム産業協会リフォームコンテスト北海道支部審査委員長
- ○北海道建築士会札幌支部理事
- ○北海道中小企業家同友会　北海道ゼロカーボン研究会　会計監査
- ○2030北海道・札幌オリンピック・パラリンピックプロモーション委員
- ○（一社）北海道リソース・コンサルティング理事
- ○北海道中小企業家同友会西・手稲地区幹事
- ○札幌市福祉のまちづくり推進協議会委員

昨年度の当財団の福祉住宅建築助成事業へのご応募は、コロナ禍や物価高騰の影響等による住宅着工戸数減少の中、これまでに無い少数となりました。しかしバリアフリー住宅の進化を感じさせる素晴らしい作品ばかりが集まり、大変感銘を受けた次第です。

日本では非常に優秀なバリアフリーの技術やアイディアを用いた住宅が、まだまだあるでしょう。バリアフリー普及のためには、その技術・アイディアを建築業界、一般ユーザー共々広く認知していただくことが必要で、その役割の一端を当財団が担っていきたい。あらためて、強くそう感じる次第です。

今後とも皆様の貴重なご指導ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

(公財)ノーマライゼーション住宅財団

第34回
2024 福祉住宅建築助成実例集
ふれあい

公益財団法人
編集・発行　ノーマライゼーション住宅財団
〒060-0042　札幌市中央区大通西16丁目2-3　ルーブル16　9F
電話(011)613-7551　　FAX(011)612-8431
http://www.normalize.or.jp

2024年8月発行

「すべての人が共に暮らし共に生きることが
ノーマル（正常）である」という
ノーマライゼーション理念に基づき、
高齢者や障がい者にとっても安全・安心で
快適に暮らせる住生活環境の整備・向上のため、
助成金により福祉住宅の建築を
支援いたします。

すべての人にやさしい住まいの環境を考える
Normalization Housing Foundation

総額
300万円

2024
年度
第36回

福祉住宅・福祉小規模集合住宅
バリアフリー建築助成

助成の対象者

高齢者や障がい者が安心して暮らせる住宅、また将来身体機能が低下しても
安心して生活できる住宅として新築やリフォームした建築主
※原則として2023年12月以降に工事が完了した物件

福祉住宅

新築（バリアフリーにした物件）やリフォーム
（住宅内外の手すり・スロープ・トイレ・浴室等）
の住宅改善・改修した建築主

福祉小規模集合住宅

グループホームや高齢者向けアパートなど
（10名程度住居）の建築主

応募期間

2024年5月1日～
11月30日（必着）
年1回公募

応募先
公益財団法人
ノーマライゼーション
住宅財団
〒060-0042
札幌市中央区大通西16丁目
2-3 ルーブル16 9階
Tel:011-613-7551
Fax:011-612-8431
E-mail:zaidan@tsuchiya-grp.com
http://www.normalize.or.jp/

詳しくは
ウェブサイトを
ご覧ください

主催
公益財団法人ノーマライゼーション住宅財団
後援
北海道・社会福祉法人 北海道社会福祉協議会・札幌市・社会福祉法人 札幌市社会福祉協議会・一般社団法人 北海道デザイン協議会

公益財団法人 ノーマライゼーション住宅財団

福祉住宅の実例、財団の活動に関しては

ノーマライゼーション住宅財団のホームページをご覧ください

http://www.normalize.or.jp